№８３９５（2003.3.26）

第３４回（２００２年度）サントリー音楽賞は
小澤征爾、木村かをり　両氏に決定

財団法人　サントリー音楽財団は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第３４回（２００２年度）受賞者を小澤征爾氏、木村かをり氏の同時受賞に決定しました。

●選考経過

１．２００３年1月１３日（月・祝）東京・丸の内の東京會館において、選考委員９名により第一次選考を行い、「候補者」を選定した。

２．引き続き３月１８日（火）東京・千代田区紀尾井町のホテル・ニューオータニにおいて最終選考会を開催、選考委員９名により慎重な審議の結果、第３４回（２００２年度）サントリー音楽賞受賞者に小澤征爾、木村かをり両氏が選定され、同日理事会において正式に決定された。

●賞金は各７００万円。

●小澤征爾氏・木村かをり氏の贈賞理由は下記の通り。

●選考委員は下記の９氏。

礒山　雅・岩井宏之・岡部真一郎・白石美雪・武田明倫
丹羽正明・根岸一美・船山　隆・三宅幸夫

（敬称略・５０音順）

小澤征爾　（ 指揮 ）

＜贈賞理由＞

海外での活動を主とする国際派の小澤征爾氏だが、２００２年は日本国内での活動もすこぶる活発であった。わけてもオペラでのブリテン「ピーター・グライムズ」（８月２７、２９、９月１、３日、サイトウ・キネン・フェスティバル松本)、ならびにオーケストラ演奏会でのベルリオーズ「幻想交響曲」と「レリオ」の一括公演（７月２日、＜東京の夏＞音楽祭）は、２大頂点であったといってよく、創造的かつ劇的な表現により作品から新しい価値を引き出し、小澤氏ならではの新しい魅力を作品に加えて聴衆を魅了したのが記憶に新しい。これに加えて新日本フィル、水戸室内管弦楽団、小澤征爾オペラ塾における指揮を通して、一方でわが国のクラシック音楽界の水準向上に尽力するとともに、他方でクラシック音楽の普及、聴衆を増やす役割を好むと好まざるにかかわらず担わされ、その責も十二分に果たしてきた。名実ともに現在の日本を代表する指揮者　――　これは小澤氏をおいて他にいない。

北米とヨーロッパにおいて、小澤氏は長年にわたって際立った活動を継続してきた。その目覚ましい活動ぶりがかの地の人々に、日本の音楽界と指揮者に対する認識を根本的に改めさせるきっかけになったであろうことは、想像に難くない。氏は自身の道を切り開いたばかりでなく、パイオニアとして、後進がその道を切り開くのに大なり小なり力を添える役割も果たしてきたように思われる。こうした点も高く評価しなければなるまい。

＜略　歴＞

１９３５年中国旧奉天生まれ。桐朋学園で故齋藤秀雄に指揮を学ぶ。５９年ブザンソン指揮者国際コンクール第１位。翌年、クーセヴィツキー賞。ヘルベルト・フォン・カラヤンに師事、バーンスタインの目にとまり、６１／６２年シーズンには、ニューヨーク・フィルの副指揮者となる。シカゴ交響楽団のラヴィニア・フェスティバル音楽監督、トロント交響楽団音楽監督を務め、７０年タングルウッド音楽祭の芸術監督に就任、同年１２月サンフランシスコ交響楽団の指揮者・音楽監督に就任。７３年ボストン交響楽団第１３代音楽監督に就任、７６／７７年シーズンからサンフランシスコ響の音楽アドヴァイザーに就任。ボストン響の音楽監督として、アメリカ国内はもとより、オーケストラの評価を国際的にも高めた。中国では演奏活動に加えて、中国音楽人の指導・学習など、文化交流を果たす一方、ヨーロッパでの評価と人気も絶大なものがあり、ベルリン・フィル、ウィーン・フィルなどのオーケストラを定期的に指揮する。また、オペラの分野でもパリ・オペラ座、ザルツブルク、ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場にしばしば出演し絶賛を博しており、２００２年よりウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任した。

日本においては、秋山和慶とともに恩師齋藤秀雄を偲んでサイトウ・キネン・オーケストラを設立、８７年より正式に活動を開始、９２年より、芸術的念願であった国際的音楽祭“サイトウ・キネン・フェスティバル松本”へと発展させた。また２０００年より若い音楽家の教育を目的に、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトを開始。創立時より密接な関係にある新日本フィルの名誉芸術監督、水戸室内管弦楽団の顧問を務め、定期的な活動を行っている。

９８年にフランス政府よりフランス芸術文化勲章シュヴァリエ章、２０００年米ハーバード大学名誉博士号を授与される。２００１年フランス芸術アカデミー外国人会員に、日本で文化功労者に選ばれる。２００２年オーストリア勲一等十字勲章、２００３年毎日芸術賞。

木村かをり　（ ピアノ ）

＜贈賞理由＞

木村かをり氏は、１９６８年のデビュー・リサイタル以来、終始一貫して、メシアンを最も重要で得意なレパートリーとしてきた。メシアンのピアノ独奏曲はもとより、室内楽や管弦楽曲に積極的にとりくんできた木村氏は、同時に、武満徹や一柳慧、松村禎三など、現代日本の作曲家の音楽にも強い関心を持ち続けてきた。「ピアノリサイタル　２００２ ― オリヴィエ・メシアンを偲んで（没後１０年） ― 」は、このような氏の持続する志によって企画・実現されたもので、メシアンと今日の日本の若い作曲家（権代敦彦、田中カレン）がカップリングされ、その相互関係に光があてられ、２００２年の日本の音楽界でもっとも注目すべき音楽会となった。

木村氏のメシアンの演奏解釈は、鋭敏な聴覚によってシャープな音像を捉え、高度な技巧を駆使して精緻な構造を創り、さらにそこに強いダイナミックな意志が加わって、新鮮であると同時に甘美な成熟した響きの宇宙が創り出される。

武満や一柳を好んでとりあげてきた木村氏は、若手の権代と田中の演奏では、新しい世代に対する全面的な共感を示していた。権代の『十字架への道／光への道』の音と光のベクトル、また田中の『クリスタリーヌ』の透明な水晶体のような感覚的な響きは、ともに斬新な音楽の世界観を示していたが、そこには遠くメシアンの世界がこだましている。

このような氏のアクチュアルな視点にもとづく創造的な演奏解釈は、２１世紀の世界と日本の演奏と創造の両面にわたる方向を暗示しているものである。この３回のコンサートは、３０年以上にわたる木村氏の真摯な音楽探求の所産であり、３４回目のサントリー音楽賞にまさにふさわしい充実したものと高く評価できる。

＜略　歴＞

東京芸術大学に入学。１９６３年パリ国立音楽院に留学。６５年同音楽院を首席で卒業。

６７年第１回メシアン現代音楽国際コンクールで第２位に入賞。その後、メシアンならびにイヴォンヌ・ロリオ女史に師事。日本国内だけでなく、ヨーロッパ、アメリカなどでも活躍しており、特にメシアンのスペシャリストとして高い評価を受ける。

７６年フランス・デッカより発売のメシアンのレコードに対してＡＣＣディスク大賞が贈られた。これまでにインバル／フランクフルト放送響、岩城宏之／ＮＨＫ交響楽団、小沢征爾／新日フィル、ガンサー・シュラー／アメリカ交響楽団 他数多くの演奏家と共演。現代音

楽の初演に大きく活躍の場をもち、初演作品の多くが賞を受賞している。

第８回（８９年度）中島健蔵音楽賞、第８回（９３年）京都音楽賞を受賞。９９年２０世紀の作曲家の作品を採り上げた意欲的なプログラムで、全５回の連続リサイタルを開催。高度なテクニックと精緻な音楽性が高く評価され、第５０回（９９年度）芸術選奨文部大臣賞、及び第９回朝日現代音楽賞受賞。

２００１年フランスで開催された第４回メシアン･フェスティヴァルでリサイタルを行う他、ロン･ティボー国際コンクールに審査委員として招聘され、２００２年フランス、オルレアンの２０世紀ピアノ音楽国際コンクールの審査委員にも招かれる。また、師であるメシアンのピアノ曲の大作３作品を採り上げ、３回のリサイタルを行い好評を博し、同年１１月紫綬褒章を授与される。

１９９６年４月より、くらしき作陽大学で教授として後進の指導に当たっている。

第３４回サントリー音楽賞　受賞の言葉

小澤　征爾

今回、日本での私の活動を総合的な見地で評価していただき、大変嬉しく思います。

この受賞は私ひとりの力ではなく、サイトウ・キネン・オーケストラのメンバー、新日本フィルのメンバー、水戸室内管弦楽団のメンバー、そして音楽塾やサイトウ・キネン室内楽勉強会で若い音楽家を指導してきた仲間たちがいたからこそ実現したものです。ですから、彼らと共にこの受賞を喜びたいと思います。

また、われわれ音楽家の活動は常に多くの支援者やスタッフによって支えられており、この方たちの存在なくしては充実した活動は出来ません。この場を借りてこれらの方々にお礼を申しあげたいと思います。

これからも力のある限り、やっていきたいと思っております。

木村　かをり

「青天の霹靂」という言葉を、こういうときに使うのが適切かどうかわかりませんが、今の私の心境を表現するには、ぴったりという感じがします。

昨年、メシアン没後十年に因んで、春、夏、秋の三回連続でリサイタルを行った際、この年からサントリー音楽賞に加えて新設された「佐治敬三賞」が応募制と知り、申請の手続きをしました。“運がよければ、受賞できるのでは…”という淡い希望を抱いていましたが、まさか「音楽賞」がいただけるとは、夢にも思っていませんでした。ただただ驚いています。

私の音楽人生に転機を与えてくれた“師”オリビエ･メシアンの没後十年のリサイタルで、この栄誉ある賞をいただけたことは、本当に感無量です。と同時に、これまで私を支えて下さったたくさんの方々に、心からお礼を申しあげます。

（ご参考）

サントリー音楽賞について

（財）サントリー音楽財団では、１９６９年の設立以来、わが国における洋楽の振興を目的として、毎年、その前年度においてわが国の洋楽文化の発展にもっとも顕著な功績のあった個人又は団体を顕彰し、「サントリー音楽賞」（旧名・鳥井音楽賞）を贈呈しています。賞金は７００万円。

これまでに「サントリー音楽賞」を受賞した方々は下記の通りです。

第１回	１９６９年度	小林　道夫（ピアノ・チェンバロ・指揮）
第２回	１９７０年度	堤　　剛（チェロ）
第３回	１９７１年度	三谷　礼二（オペラ演出）
第４回	１９７２年度	小川　　昂（理論・評論）
第５回	１９７３年度	ＩＣＵオルガン委員会（国際基督教大学）
第６回	１９７４年度	秋山　和慶（指揮）
第７回	１９７５年度	栗林　義信（声楽）
		山根　銀二（評論）
第８回	１９７６年度	芥川　也寸志と新交響楽団
第９回	１９７７年度	常森　寿子（声楽）
第１０回	１９７８年度	松村　禎三（作曲）
第１１回	１９７９年度	吉原　すみれ（打楽器）
第１２回	１９８０年度	妹尾　河童（舞台美術）
	特別賞	江戸　英雄（第１回日本国際音楽コンクール会長）
第１３回	１９８１年度	柴田　南雄（作曲）
第１４回	１９８２年度	外山　雄三（指揮）
	特別賞	原　　清（ザ・シンフォニーホール建設グループ代表）
第１５回	１９８３年度	鈴木　敬介（オペラ演出）
第１６回	１９８４年度	豊田喜代美（声楽）
第１７回	１９８５年度	日本テレマン協会（室内管弦楽団・合唱団）
第１８回	１９８６年度	内田　光子（ピアノ）
		若杉　　弘（指揮）
第１９回	１９８７年度	岩城　宏之（指揮）
第２０回	１９８８年度	林　　康子（声楽）
第２１回	１９８９年度	有田　正広（古楽演奏）
第２２回	１９９０年度	武満　　徹（作曲）

第２３回	１９９１年度	尾高　忠明（指揮）
第２４回	１９９２年度	練木　繁夫（ピアノ）
第２５回	１９９３年度	五嶋みどり（ヴァイオリン）
	特別賞	ウォルフガング・サヴァリッシュ（指揮）
第２６回	１９９４年度	和波　孝禧（ヴァイオリン）
第２７回	１９９５年度	今井　信子（ヴィオラ）
第２８回	１９９６年度	園田　高弘（ピアノ）
		湯浅　譲二（作曲）
第２９回	１９９７年度	東京交響楽団
第３０回	１９９８年度	林 光（作曲）
第３１回	１９９９年度	三善 晃（作曲）
第３２回	２０００年度	飯守泰次郎（指揮）
第３３回	２００１年度	一柳　慧（作曲）

特別贈賞	１９７９年６月	巖本真理弦楽四重奏団
〃	１９９７年８月	黛　敏郎（作曲）

以　　上